

琉球大学学術リポジトリ

沖縄こどもの国を利用した生活科を教える教員養成 実践に対する受講学生の授業評価

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2016-09-02 キーワード (Ja): 小学校, 生活科, 教員養成, 授業評価, 校外学習 キーワード (En): Elementary School, Living Environment Studies, Teacher Training, Class Evaluation, Field Trip 作成者: 吉田, 安規良, 中尾, 達馬, 齊藤, 由紀子, 福本, 晃造, 吉岡, 由恵, 比嘉, 源和, 高田, 勝, 翁長, 朝, 山本, 暁, 中村, 智映, 田名, 俊仁, Yoshida, Akira, Nakao, Tatsuma, Saito, Yukiko, Fukumoto, Kozo, Yoshioka, Yoshie, Higa, Genwa, Takada, Masaru, Onaga, Hajime, Yamamoto, Akira, Nakamura, Tomoaki, Dana, Toshihito メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35106

沖縄こどもの国を利用した生活科を教える教員養成実践に対する 受講学生の授業評価

吉田 安規良¹・中尾 達馬²・齊藤 由紀子³・福本 晃造⁴・吉岡 由恵⁵・
比嘉 源和⁵・高田 勝⁵・翁長 朝⁵・山本 暁⁵・中村 智映⁵・田名 俊仁⁵

A Practical Report of Teaching “Living Environment Studies” with Field Trip in Okinawa Zoo & Museum, Using the Class Evaluation of Undergraduates from 2008 to 2015

YOSHIDA Akira¹, NAKAO Tatsuma², SAITO Yukiko³, FUKUMOTO Kozo⁴, YOSHIOKA Yoshie⁵,
HIGA Genwa⁵, TAKADA Masaru⁵, ONAGA Hajime⁵, YAMAMOTO Akira⁵, NAKAMURA Tomoaki⁵
and DANA Toshihito⁵

【要約】

本研究の目的は、2008年度から2015年度までの授業評価アンケートを用いながら、琉球大学教育学部理科教育講座が提供する「沖縄こどもの国における校外学習を用いた生活科科目」についての実践報告を行い、今後の生活科に関する科目のあり方について議論することであった。受講生324名は、総じて「小学校教諭を目指す大学生にとって沖縄こどもの国での校外学習を取り入れた生活科の教師教育実践は有意義である」と評価していた。また、自由記述の内容分析からは、沖縄こどもの国での体験（たとえば、ヘビが生きたネズミを補食する様子の観察）を通して、受講生たちはこれらを直接教材にできるかどうかだけではなく、「教師の学びとしての重要性」や「自然との関わりを児童にどのように学ばせるのか」についても考えを巡らせているようであった。今後は、小学校第3学年以上で学ぶ理科の授業とのつながりを意識した授業内容や天候に依存しない授業内容を検討する必要がある。

[キーワード] 小学校, 生活科, 教員養成, 授業評価, 校外学習

【Abstract】

The purpose of this study was (1) to report the educational practices for undergraduates of teaching “Living Environment Studies” with field trip in Okinawa Zoo & Museum, using the class evaluation from 2008 to 2015, and (2) to discuss the direction of this subject in which we could be heading. This subject was designed and offered by the Department of Natural Sciences, Faculty of Education, University of the Ryukyus. In general, 324 undergraduates evaluated the subject that it would be useful for university students with the aim of becoming an elementary school teacher. Content analysis of free-description revealed that the field trip experiences in Okinawa Zoo & Museum (e.g.,

1 琉球大学教育学部理科教育講座・教育実践学教室; Department of Natural Sciences and Educational Practice Major, Faculty of Education, University of the Ryukyus

2 琉球大学教育学部学校教育講座・子ども地域教育教室; Department of School Education and Community-Based Childhood Education Course, Faculty of Education, University of the Ryukyus

3 琉球大学教育学部理科教育講座・自然環境科学教育教室; Department of Natural Sciences and Natural Environment Science Course, Faculty of Education, University of the Ryukyus

4 琉球大学教育学部理科教育講座・理科教育教室; Department of Natural Sciences and Science Major, Faculty of Education, University of the Ryukyus

5 公益財団法人 沖縄こどもの国; Okinawa Zoo & Museum

Observation on the feeding time when snake eat living rat) have offered an opportunity for undergraduates to think not only whether these experiences could become the teaching materials or not, but also the importance of learning for teacher themselves and how to let children learn the interaction with the nature. We have to consider the contents of the class for not depending on the weather condition and the connection between contents of “Living Environment Studies” and “Science” which children learn from the 3rd to the 6th grade in the elementary school.

[Key words] Elementary School, Living Environment Studies, Teacher Training, Class Evaluation, Field Trip

1. はじめに

1989年(平成元年)に告示された学習指導要領においては、「知識偏重の学力観を改め、自ら学ぶ意欲と思考力、判断力、表現力を重視する」教育(いわゆる「新学力観」)が打ち出され、子どもの学習意欲や関心が低いことの克服が課題とされ、子どもに教え込むことで最低の内容を保障するよりも、子どもに寄り添い学びを促すことが求められた(木村, 2015)。その解の1つが、社会科や理科ではない、遊びや体験的な活動を重視した全く別な教科である生活科の新規導入である。この時の小学校学習指導要領に基づく教育課程から、新しい教科として小学校第1学年及び第2学年に生活科が導入され、それ以前の教育課程で存在していた小学校低学年における社会科と理科が廃止された。これは同時期に高等学校における地理歴史科と公民科が、それまでであった社会科を分割・再編して生まれたのと異なる。小原(2002)は、生活科新設の理由として「① 幼児期から児童期への過渡的な段階にある低学年の児童の発達特性に適合した教科の設定」、「② 幼稚園教育と小学校低学年の教育との接続・発展を図る教科の設定」、「③ 社会や環境の変化にともなう児童の実態と課題への対応」、「④ これまでの低学年の社会科や理科の学習指導に対する反省(学習に対する反省ではなく教師中心の表面的な知識の伝達によることばで理解するだけの学習になりやすいという学習指導(方法)の反省)」の4つを指摘している。

本来の小学校低学年の社会科と理科の学習は、具体的な活動や体験を通して学ぶ生活学習であったこと(小原, 2002)が示すように、実際にはそれまで行われてきた小学校低学年における社会科

と理科の学習内容の一部は生活科に統合され、小学校第3学年以上で学習する社会科や理科の学習内容と生活科の学習内容にはつながりがある側面もある。その一方で、社会科や理科をはじめとする他の教科は、その背景となる特定の科学が存在しており、初等中等教育段階から高等教育段階に至るまで何らかの系統性を構築しているのに対し、生活科には背景となる特定の科学(学問的背景)が存在していない(朝倉, 2002)。この生活科の抛り所のなさが、大学での小学校教員養成における生活科の責任の所在が不明瞭になってしまうことにつながってしまうとも考えられる。実際に琉球大学教育学部には、生活科の背景となる学問分野を支える講座(教員組織)やコース・専修(学生教育組織)は整備されていない。一方で、「見方を変えれば、生活科は全ての科学が背景にあるということもできる」(朝倉, 2002)こともあり、現在、琉球大学教育学部では生活科の科目「生活科教育概論」(教育職員免許法上の「教科に関する科目」)運営に際し、各教科に関係する講座が分担している。

小学校での生活科と理科の間には直接の関係はないが、生活科導入時から動物の飼育や植物の栽培といった理科学的な活動が生活科では重視されている。加えて、現在では指導計画作成に対する配慮事項として「自分と地域の人々、社会及び自然とのかかわりが具体的に把握できるような学習活動を行う」のみならず「校外での活動を積極的に取り入れること」が求められている(文部科学省, 2008a:73)。これは「児童がその場に行き、その場の環境に身を置き、そこでの事実や事物に触れる活動ができるようにすること」であり、「体

験や活動を通して学ぶという生活科の本質に根ざしたものであり、一層重視することが望まれる」ものであるとともに、「交通や活動場所に対する安全等への十分な配慮」や「十分な活動時間を保障した上で、児童が安心して活動できる空間の確保に努めること」が大切であることを意味している（文部科学省、2008b）。これを先取りする形で、理科教育講座が担当する生活科に関する科目は、「校外学習」の重要性を実体験しながら学べる工夫として、2007年度から沖縄こどもの国を利用して実施している（吉田ほか、2009）。

2016年（平成28年）に琉球大学大学院教育学研究科に専門職学位課程（教職大学院）を設置することに伴う教育学部・教育学研究科内の教員人事異動に対応して、理科教育講座では生活科に関する科目の担当者を変更するため、これまでの沖縄こどもの国を利用した生活科の授業に対する受講学生の授業評価を分析し、これまでの教育実践—特に現在の1日日程での実践を始めた2008年度以降—を省察することとした。本報では授業評価の中でも、2008年度から実施している5段階評価での回答状況を分析した結果を中心に報告するとともに、理科教育講座が提供する今後の琉球大学教育学部における生活科に関する科目の在り方について論ずる。これにより小学校の教員養成や現職教師教育の在り方を検討する端緒に資することを目的とする。

2. 沖縄こどもの国での実践

琉球大学教育学部での生活科に関する授業は週1回90分の講義形式で開講されているが、理科教育講座の担当は校外学習で実施するため土曜日等に振替して実施してきた。試行的意味もあった2007年度は半日日程での実施だったが、2008年度からは受講学生の増加への対応として開講クラス数を増やしたことに伴って分担時間数が2倍になった。そのため1日日程で実施している。また、2009年度までは教育職員免許状上の「教職に関する科目」の中の「教育課程及び指導法に関する科目（各教科の指導法）」である「生活科教育研究」として実施し、2010年度以降は教育職員免許法上の「教科に関する科目」である「生活

科教育概論」として実施している。つまり2009年度までは「生活科を指導する方法について学ぶ」ことを意識し、2010年度以降は「生活科で学習する内容について学ぶ」ことを意識して実施している。ただし、柴田（1974）や真船（1986）が指摘するように、授業の形態や方法の決定は基本的には学習する内容と関連して行われるのが初等中等教育段階における授業研究の基本であるため、「何を（教材内容）教えるのか」と「どう、いかに（学習過程と学習方法）教えるのか」を切り離さずに教員志望の学生に学ばせることを意識した。そのため沖縄こどもの国での実践では、厳密に「指導法」と「学習内容」を切り離して一方だけを学ばせるようにはしないよう心がけた。

以下に各年度の実践の概略を示すが、この実践はアクティブラーニング型¹の授業（小林、2015）である。ここでは、沖縄こどもの国が提供できる小学校低学年向けの体験を追体験したり、沖縄こどもの国での体験を教材化したりするに留まらず、教材や教具、体験や演示、授業実践等が生活科の学びに妥当かどうかを再度児童目線で再確認（評価）する過程も取り入れていった。つまり、実際に授業する小学校教員の視点と児童の視点を行き来しながら体験することで授業研究の視点を育む契機を提供することを心がけた。

なお、沖縄こどもの国が提供できる体験を授業内容の企画と当日の運営は主に吉田と吉岡が行った。2008年度は当時 琉球大学大学院教育学研究科修士課程に在籍していた高嶺智徳氏が学位論文の研究の一環として実践に携わった。2015年度は齊藤、福本が授業を参観した。授業づくりやワークシート作成といった小学校の生活科の授業実践に直接関係する演習と当日の全体進行は吉田が、吉岡ほか沖縄こどもの国の職員がそれ以外の内容に関する授業をそれぞれ担当した。一部の内容に関して、沖縄こどもの国側の企画・立案・運営責任者が吉岡以外の場合にはその担当責任者を【 】内に記載した²。

(1) 2008年度 [2008年5月17日（土）実施（受講登録者39名、当日出席者37名）]

※入園料・実習材料費として当日1人500円徴収

9:30 集合・受付

- 10:00 オリエンテーション [15分]
 10:15 観察実習 [75分]
 ● 3～4人で1班を編制し、園内の動物を
 与えられた課題の答えを見つけながら観
 察
 11:30 バックヤードツアー [30分]
 ● 新設されたゾウ舎のバックヤード見学
 ● 午後の体験の材料である糞の採取
 13:00 体験学習 [150分]
 ● 参加者を2組に分け、ゾウの糞を利用し
 た紙漉体験と園内小動物とのふれあい体
 験とを交互に実施
 15:30 動物ものまね大会 [60分]
 ● ある動物を観察し、クイズ形式でその鳴
 き声や形態をものまねする
 16:30 まとめ・レポート課題提示・授業
 評価アンケート記入 [30分]
 課題：感想文 (A4 1～2枚)
 17:00 解散

- (2) 2009年度 [2009年5月16日(土)実施(受
 講登録者44名, 当日出席者42名)]
 ※入園料として当日1人400円徴収
 9:30 集合・受付
 ● 受付時に活動のための班をくじ引きで編
 制(2～4人で1班)
 10:00 講義Ⅰ「沖縄こどもの国」の説明
 (総論) [30分]
 ● 今日の講義内容の概要説明
 ● 沖縄こどもの国とはどんなところなのか
 【担当 比嘉】
 10:30 講義Ⅱ「沖縄こどもの国で学べる
 こと」 [180分, 12:00～13:00
 休憩]
 ● 班を2組に分け、内容①と②に関する講
 義を午前 [90分], 午後 [90分] にそれ
 ぞれ実施した
 内容① 家畜や飼育, 民俗学的なアプロー
 チ【担当 高田】
 内容② 動物の生態学的アプローチ
 14:40 演習「沖縄こどもの国をつかって,
 どんな生活科の授業ができるか?」
 (授業プランの作成) [95分]

条件

- ① 児童の学校↔沖縄こどもの国 の移動
 時間を含めず、正味の学習時間として
 90分(2単位時間相当)
 ② 90分間 沖縄こどもの国で「どんな体
 験や経験」をさせて「どんな学び」をさ
 せるのか(場合によっては、事前・事
 後の活動まで)
 ③ 子どもの体力, 興味・関心に配慮し, 「沖
 縄こどもの国」での校外学習ならでは
 の“ねらい”に沿った活動を取り入れる
 ● 班ごとに園内活動, プレゼンテーション
 (企画案)作成時間
 16:15 プレゼンテーション [45分]
 ● 1班2分程度
 ● プレゼンテーションの相互評価
 17:00 レポート課題提示・授業評価アン
 ケート記入・解散
 課題:「今日の講義を通して, どんなことを
 学べたか, どんなことを考えたか?」をA4
 1～2枚程度にまとめる。
- (3) 2010年度 [2010年5月29日(土)実施(受
 講登録者49名, 当日出席者48名)]
 ※入園料として当日1人400円徴収
 9:30 集合・受付
 ● 受付時に活動のための班をくじ引きで編
 制(3～4人で1班)
 9:45 講義Ⅰ「沖縄こどもの国」の説明(総
 論) [30分]
 ● 今日の講義内容の概要説明
 ● 沖縄こどもの国とはどんなところなのか
 10:15 講義Ⅱ「沖縄こどもの国で学べる
 こと～『命のつながり・大切さ』を
 感じる」 [180分, 11:45～12:45
 休憩]
 ● 班を2組に分け、内容①と②に関する講
 義・演習(体験)を午前 [90分], 午後 [90
 分] にそれぞれ実施した
 内容① 小型動物や沖縄の動物(固有種)に
 ついて(生きているネズミをヘビ
 が捕食する様子の観察を含む)
 内容② 大型動物について, 乗馬(別料金

のため希望者のみ)

- 14:30 演習「沖縄こどもの国をつかって、
どんな生活科の授業ができるか？」
(授業プランの作成) [120分]

条件

- ① 児童の学校←→沖縄こどもの国 の移動
時間を含めず、正味の学習時間として
90分(2単位時間相当)
 - ② 90分間 沖縄こどもの国で「どんな体
験や経験」をさせて「どんな学び」をさ
せるのか(場合によっては、事前・事
後の活動まで)
 - ③ 子どもの体力、興味・関心に配慮し、「沖
縄こどもの国」での校外学習ならでは
の“ねらい”に沿った活動を取り入れる
- 班ごとに園内活動、プレゼンテーション
(企画案)作成時間
- 16:40 プレゼンテーション 1班2分程
度 [40分]
- プレゼンテーションの相互評価
- 17:20 園内自由観察(寝室へもどる動物
の観察)
- 18:00 レポート課題提示・授業評価アン
ケート記入・解散
- 課題:「今日の講義を通して、どんなことを
学べたか、どんなことを考えたか?」をA4
1~2枚程度にまとめる。
- (4) 2011年度 [2011年4月23日(土), 2011年
5月14日(土)実施(受講登録者50名, 当
日出席者41名(4月23日), 8名(5月14日)
計49名)
- 2011年度は、当初実施日(4月23日)が
教育学部新入生合宿研修に重なった。その
ため合宿研修の運営に携わっている学生が
履修できなくなるため、運営に携わった学
生に対する補講を5月14日に同じ内容で実
施した。
- ※入園料・実習材料費として当日1人700円
徴収
- 9:30 集合・受付
- 受付時に活動のための班をくじ引きで編
制(3~4人で1班)

- 9:45 講義I 「沖縄こどもの国」の説明(総
論) [30分]

- 今日の講義内容の概要説明
 - 沖縄こどもの国とはどんなところなのか
- 10:15 講義II 「沖縄こどもの国で学べる
こと」 [300分, 12:45~13:45
休憩]

- 班を2組に分け、内容①と②に関する講
義・演習(体験)を午前 [150分], 午後
[150分]にそれぞれ実施した。

内容① 黒糖づくり【担当 比嘉】

内容② ハ虫類について(骨ストラップの
製作, (生きているネズミをヘビが
捕食する様子の観察, バックヤ
ードツアーを含む)

- 16:30 園内見学(寝室へ戻る動物の観察
のためのバックヤードツアー)

- 18:00 レポート課題提示・授業評価アン
ケート記入・解散

課題:「今日の講義を通して、どんなことを
学べたか、どんなことを考えたか?」をA4
1~2枚程度にまとめる。

- (5) 2012年度 [2012年5月13日(日)実施(受
講登録者43名, 当日出席者43名)]

※入園料・実習材料費として当日1人1,000
円徴収

11:30 集合・受付

- 受付時に活動のための班をくじ引きで編
制(2~3人で1班)

11:45 オリエンテーション [15分]

12:00 講義I 「大昔の人々のご飯」 [120
分]【担当 翁長】

- 雑草てんぷら(雑草(野草)の採取と調理)
とダチョウの卵焼き
- 当初は105分間で行う予定であったが、
後片付けに時間がかかったため120分程
度かけて実施した

14:15 講義II 「琉球藍染め体験」 [60分]
講義III 「沖縄の民族学的特徴」 [60
分]【担当 高田】

- 班を2組に分け、講義IIと講義IIIを交互
に実施した

- 当初は各講義とも30分ずつ(合計60分)の予定であったが、両講義とも60分程度かかった

16:45 講義Ⅳ「沖縄こどもの国」とは[15分]【担当 比嘉】

- 当初は15:15～16:00[45分]に実施する予定であったが、講義Ⅰ～Ⅲで時間を延長したため、講義Ⅳを短縮した

17:00 講義Ⅵ「バックヤードツアー」[30分]

- 天候の変化(降雨)が予想されたため、講義Ⅴと講義Ⅵの順番を入れ替えて実施した

- 当初は60分の予定であったが、30分に短縮してゾウ舎のバックヤード見学のみ実施した

17:45 講義Ⅴ「生き物の生活(食)」[45分]

- ヘビの生態の説明
- 生きているネズミをヘビが捕食する様子の観察

18:40 講義Ⅶ「夜の動物園」(園内見学)・まとめ[80分]

- 当初は120分の予定であったが、雨天のため「夜の動物園」(園内見学)を60分に短縮して実施し、その後まとめを兼ねて沖縄こどもの国職員に対する質疑応答の時間とした

20:00 レポート課題提示・授業評価アンケート記入・解散

- 降雨のため終了を当初の予定より30分繰り上げた

課題:「今日の講義を通して、どんなことを学べたか、どんなことを考えたか?」をA4 1枚の絵日記で提出する。

(6) 2013年度[2013年6月9日(日)実施(受講登録者40名,当日出席者39名)]

当初は6月1日(土)に実施予定であったが、大半の受講者が履修していた他の講義の振替実施日と重複し、それが沖縄県外から非常勤講師を招聘しての講義であったため、こちらの授業日を変更して実施した。変更後の日程がさらに他の別な講義の振替

実施日と重複したため、1名が履修できずに欠席した。

※入園料・実習材料費として当日1人900円徴収

9:00 集合・受付

- 受付時に活動のための班をくじ引きで編制(2～3人で1班)

9:15 講義Ⅰ「沖縄こどもの国」とは(説明)[75分]

- 生きているネズミをヘビが捕食する様子の観察を含む

10:45 講義Ⅱ「人のくらしと自然との関わりについて」[135分]

- 人の食と生き物の関わりワークシopp [35分]

- 沖縄の歴史と民族性[20分]

- 琉球藍染め体験[80分]

13:45 講義Ⅲ「沖縄こどもの国での生活科の授業ワークシート作成実習」[120分]

- 沖縄こどもの国で生活科の授業をすることを想定したワークシート(A4 1枚)を班ごとに作成する

16:00 講義Ⅳ「ワークシoppの実用性の評価実習」[60分]

- 他の班が作成したワークシートを児童の側に立って実際に使用して評価する

17:15 講義Ⅴ 実習のまとめ・全体のまとめ[60分]

- 作成したワークシoppの発表とそれを実際に使用しての評価内容の発表

- 講義全体の総括

18:15 レポート課題提示・授業評価アンケート記入・解散

課題:「今日の講義を通して、どんなことを学べたか、どんなことを考えたか?」をA4 1枚の絵日記で提出する。

(7) 2014年度[2014年5月31日(土)実施(受講登録者45名,当日出席者44名)]

※入園料・実習材料費として当日1人1,000円徴収

8:50 集合・受付

- 受付時に活動のための班をくじ引きで編制（2～3人で1班）
 - 9：00 講義Ⅰ「沖縄こどもの国の役割」[30分]
 - 9：30 講義Ⅱ「沖縄の自然について～ヘビをテーマに」[60分]【担当 中村】
 - ヘビが生きているネズミを捕食する様子の観察
 - 10：40 講義Ⅲ「動物の恋バナ」[60分]【担当 山本】
 - 動物の生殖（飼育動物の交尾、出産、去勢）について
 - 12：40 実習Ⅰ「琉球藍染め体験」（ふるさと園の紹介を含む）[120分]
 - 14：55 実習Ⅱ「沖縄こどもの国での生活科の授業ワークシート作成実習」[120分]
 - 沖縄こどもの国で生活科の授業をすることを想定したワークシート（A4 1枚）を班ごとに作成する
 - 17：05 演習Ⅰ「ワークシートの実用性の評価」[60分]
 - 他の班が作成したワークシートを児童の側に立って実際に使用して評価する
 - 18：15 演習Ⅱ「ワークシートを評価しての討論」[45分]
 - 各ワークシートを評価した班が評価内容を発表し、それに対して作成した班が意見を述べる
 - 19：00 1日のまとめ [15分]
 - 19：15 レポート課題提示・授業評価アンケート記入・解散
- 課題：「今日の講義を通してどんなことを学べたか、こどもの国のような校外施設を活用した生活科の学びの良さとは何なのか、どんなことを考えたか？」をA4 1枚の絵日記（書き出しは「先生、あのね・・・」）でまとめるとともに「一句」（「川柳」か「狂歌」）詠んだものを提出する。
- (8) 2015年度 [2015年5月16日（土）実施（受講登録者44名，当日出席者45名³⁾]
2015年度も大半の受講者が履修していた

- 他の講義の振替実施日と重複した。ただし、他の講義のほうが別日程に変更して実施することとなったため、予定通り実施した。
※入園料・実習材料費として当日1人1,000円徴収
- 8：50 集合・受付
 - 受付時に活動のための班をくじ引きで編制（2～3人で1班）
 - 9：00 講義Ⅰ「沖縄こどもの国の役割と活用」[30分]
 - 9：30 講義Ⅱ「生き物の『ふえる』」[30分]
 - 10：15 講義Ⅲ「動物の恋バナ」[60分]【担当 山本】
 - 動物の生殖（飼育動物交尾、出産、去勢）について
 - ヘビが生きているネズミを捕食する様子の観察
 - 11：30 実習Ⅰ「在来豚ソーセージ作りと沖縄の在来家畜」[120分]
 - 琉球在来豚アグーの肉を用いたソーセージづくり
 - 14：30 実習Ⅱ「沖縄こどもの国での生活科の授業ワークシート作成実習」[120分]
 - 沖縄こどもの国で生活科の授業をすることを想定したワークシート（A4 1枚）を班ごとに作成する
 - 16：45 演習Ⅰ「ワークシートの実用性の評価」[60分]
 - 他の班が作成したワークシートを児童の側に立って実際に使用して評価する
 - 18：00 演習Ⅱ「ワークシートを評価しての討論」[60分]
 - 各ワークシートを評価した班が評価内容を発表し、それに対して作成した班が意見を述べる
 - 19：00 1日のまとめ [15分]【担当 田名】
 - 19：15 レポート課題提示・授業評価アンケート記入・解散
- 課題：
- ① 「生活科」か「沖縄こどもの国」を題に一句詠み、その句の背景を説明する。
 - ② 「今日の講義を通してどんなことを学べ

たか、こどもの国のような校外施設を活用した生活科の学びの良さとは何なのか、どんなことを考えたか？」を当日配布した絵日記用紙（A4 1枚）を用いて絵日記の形で提出する。

3. 方法

(1) 調査対象者

調査対象者は、2008年度から2015年度までの「生活科教育研究」及び「生活科教育概論」の理科教育講座担当日に出席した延べ347名である。分析の対象となったのは、この内、以下のアンケートに回答した受講学生342名であった（内訳：2008年度37名、2009年度42名、2010年度45名、2011年度48名、2012年度43名、2013年度39名、2014年度43名、2015年度45名）。

(2) 授業評価アンケート

調査対象者には、沖縄こどもの国での講義終了直後に、以下の2つのパートからなる授業評価アンケートを実施した。

① 自己評価式講義評価

調査対象者には、「あなたは、今回の沖縄こどもの国での講義についてどのように感じましたか。各評価項目について下記の選択肢から該当するものに○印をつけて下さい」と教示し、以下の9項目について、「1＝そう思わない」から「5＝そう思う」の5件法で評定を求めた。

【評価項目】

1. 講師の説明は分かりやすかった（説明）
2. 講義内容の難易度は適切だった（難易度）
3. 講義内容の分量は適切だった（分量）
4. 講義内容は期待通りだった（期待通り）
5. 講義内容は役に立つ内容だった（役立つ）
6. 使用したレジュメ、資料等は適切だった（資料）
7. 講義の時間配分は適切だった（時間配分）
8. 総合的に判断して今回の講義に満足している（総合評価）
9. 後輩や友人に薦めたくなるような講義だった（推薦）

② 自由記述式講義評価

調査対象者に対して、「①今回の講義で特に良かった点、また印象に残った点があればご記入下さい」、「②今回の講義で改善すべき点（講義内容・運営など）があればご記入下さい」と教示し、自由記述による回答を求めた。この結果は、前述の自己評価式講義評価の結果を考察する際に、参考資料として用いた。

4. 結果

延べ342名から回収できた授業評価アンケートについて、無回答や指定回答形式以外の回答を除き、残りの全てを有効回答として分析に用いた。各年度別の自己評価式講義評価の結果を表1に示す。

(1) 指標の集約

授業評価アンケートを提出した342名を対象に、自己評価式講義評価9項目について、主成分分析を行った。4つの観点（固有値の推移、固有値1以上、解釈可能性、主成分負荷量.40以上）という観点から主成分数の決定や項目の選択を行った結果、1成分（9項目）が適当であると判断した（表2）。そこで第一主成分（各年度の項目別評価の合計の平均）を「講義評価」と命名した。第一主成分に対する寄与率は46.84%であった。 $\alpha = .83$ であり、十分な信頼性（内的整合性）が得られた。

(2) 経年変化

実施年度（2008年度、2009年度、2010年度、2011年度、2012年度、2013年度、2014年度、2015年度）を独立変数とし、「講義評価」の得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、実施年度の主効果が有意であった（ $F_{(7,334)} = 11.52, p < .01$ ）。そこで多重比較（TukeyのHSD検定）を行った結果、「2009年度、2010年度、2011年度、2012年度、2013年度、2014年度、2015年度 > 2008年度」、「2011年度 > 2009年度、2010年度」であった（表3）。講義評価の得点が最も低かった2008年度について、その得点と真ん中の評定値である「3」に対して1サン

表1 2008年度から2015年度における自己評価式講義評価の記述統計量

実施年度	項目	回答者数						M	SD
		5 そう思う	4 ややそう思う	3 どちらともいえない	2 あまりそう思わない	1 そう思わない	無回答ほか		
2008年度	1 講師の説明は分かりやすかった	16	19	2	0	0	0	4.38	0.59
	2 講義内容の難易度は適切だった	20	12	4	1	0	0	4.38	0.79
	3 講義内容の分量は適切だった	7	11	11	7	1	0	3.43	1.09
	4 講義内容は期待通りだった	13	13	7	4	0	0	3.95	1.00
	5 講義内容は役に立つ内容だった	17	17	3	0	0	0	4.38	0.64
	6 使用したレジュメ、資料等は適切だった	14	16	6	1	0	0	4.16	0.80
	7 講義の時間配分は適切だった	4	3	13	9	8	0	2.62	1.23
	8 総合的に判断して今回の講義に満足している	23	10	4	0	0	0	4.51	0.69
	9 後輩や友人に薦めたいくなるような講義だった	25	9	3	0	0	0	4.59	0.64
2009年度	1 講師の説明は分かりやすかった	32	7	3	0	0	0	4.69	0.60
	2 講義内容の難易度は適切だった	26	13	2	1	0	0	4.52	0.71
	3 講義内容の分量は適切だった	20	16	5	0	1	0	4.29	0.86
	4 講義内容は期待通りだった	21	15	5	1	0	0	4.33	0.79
	5 講義内容は役に立つ内容だった	30	12	0	0	0	0	4.71	0.46
	6 使用したレジュメ、資料等は適切だった	17	19	4	1	1	0	4.19	0.89
	7 講義の時間配分は適切だった	19	16	7	0	0	0	4.29	0.74
	8 総合的に判断して今回の講義に満足している	27	14	0	1	0	0	4.60	0.63
	9 後輩や友人に薦めたいくなるような講義だった	34	7	1	0	0	0	4.79	0.47
2010年度	1 講師の説明は分かりやすかった	24	21	0	0	0	0	4.53	0.50
	2 講義内容の難易度は適切だった	28	15	2	0	0	0	4.58	0.58
	3 講義内容の分量は適切だった	27	14	4	0	0	0	4.51	0.66
	4 講義内容は期待通りだった	25	10	9	1	0	0	4.31	0.87
	5 講義内容は役に立つ内容だった	32	10	3	0	0	0	4.64	0.61
	6 使用したレジュメ、資料等は適切だった	25	18	2	0	0	0	4.51	0.59
	7 講義の時間配分は適切だった	17	17	7	4	0	0	4.04	0.95
	8 総合的に判断して今回の講義に満足している	26	17	1	1	0	0	4.51	0.66
	9 後輩や友人に薦めたいくなるような講義だった	32	9	3	1	0	0	4.60	0.72
2011年度	1 講師の説明は分かりやすかった	42	5	1	0	0	0	4.85	0.41
	2 講義内容の難易度は適切だった	44	4	0	0	0	0	4.92	0.28
	3 講義内容の分量は適切だった	38	8	1	1	0	0	4.73	0.61
	4 講義内容は期待通りだった	43	3	1	1	0	0	4.83	0.56
	5 講義内容は役に立つ内容だった	36	12	0	0	0	0	4.75	0.44
	6 使用したレジュメ、資料等は適切だった	28	15	3	1	0	1	4.49	0.72
	7 講義の時間配分は適切だった	25	20	2	1	0	0	4.44	0.68
	8 総合的に判断して今回の講義に満足している	43	4	1	0	0	0	4.88	0.39
	9 後輩や友人に薦めたいくなるような講義だった	45	3	0	0	0	0	4.94	0.24
2012年度	1 講師の説明は分かりやすかった	33	10	0	0	0	0	4.77	0.43
	2 講義内容の難易度は適切だった	31	12	0	0	0	0	4.72	0.45
	3 講義内容の分量は適切だった	23	9	6	4	1	0	4.14	1.13
	4 講義内容は期待通りだった	32	9	1	0	0	1	4.74	0.50
	5 講義内容は役に立つ内容だった	36	7	0	0	0	0	4.84	0.37
	6 使用したレジュメ、資料等は適切だった	28	13	1	1	0	0	4.58	0.66
	7 講義の時間配分は適切だった	9	7	14	10	3	0	3.21	1.23
	8 総合的に判断して今回の講義に満足している	38	5	0	0	0	0	4.88	0.32
	9 後輩や友人に薦めたいくなるような講義だった	40	3	0	0	0	0	4.93	0.26
2013年度	1 講師の説明は分かりやすかった	30	6	3	0	0	0	4.69	0.61
	2 講義内容の難易度は適切だった	35	4	0	0	0	0	4.90	0.31
	3 講義内容の分量は適切だった	28	10	1	0	0	0	4.69	0.52
	4 講義内容は期待通りだった	27	10	2	0	0	0	4.64	0.58
	5 講義内容は役に立つ内容だった	34	4	1	0	0	0	4.85	0.43
	6 使用したレジュメ、資料等は適切だった	22	12	5	0	0	0	4.44	0.72
	7 講義の時間配分は適切だった	23	10	4	2	0	0	4.38	0.88
	8 総合的に判断して今回の講義に満足している	32	7	0	0	0	0	4.82	0.39
	9 後輩や友人に薦めたいくなるような講義だった	31	4	3	0	0	1	4.74	0.60
2014年度	1 講師の説明は分かりやすかった	31	12	0	0	0	0	4.72	0.45
	2 講義内容の難易度は適切だった	32	10	1	0	0	0	4.72	0.50
	3 講義内容の分量は適切だった	23	14	5	1	0	0	4.37	0.79
	4 講義内容は期待通りだった	27	12	4	0	0	0	4.53	0.67
	5 講義内容は役に立つ内容だった	33	10	0	0	0	0	4.77	0.43
	6 使用したレジュメ、資料等は適切だった	24	15	4	0	0	0	4.47	0.67
	7 講義の時間配分は適切だった	19	16	6	2	0	0	4.21	0.86
	8 総合的に判断して今回の講義に満足している	33	10	0	0	0	0	4.77	0.43
	9 後輩や友人に薦めたいくなるような講義だった	33	10	0	0	0	0	4.77	0.43
2015年度	1 講師の説明は分かりやすかった	35	10	0	0	0	0	4.78	0.42
	2 講義内容の難易度は適切だった	36	9	0	0	0	0	4.80	0.40
	3 講義内容の分量は適切だった	31	13	1	0	0	0	4.67	0.52
	4 講義内容は期待通りだった	28	15	1	1	0	0	4.56	0.66
	5 講義内容は役に立つ内容だった	40	5	0	0	0	0	4.89	0.32
	6 使用したレジュメ、資料等は適切だった	33	6	5	0	0	1	4.64	0.69
	7 講義の時間配分は適切だった	22	12	9	2	0	0	4.20	0.92
	8 総合的に判断して今回の講義に満足している	40	5	0	0	0	0	4.89	0.32
	9 後輩や友人に薦めたいくなるような講義だった	39	5	1	0	0	0	4.84	0.42

プルの t 検定を行った結果、2008 年度の得点は、真ん中の評定値「3」よりも有意に高かった ($t_{(36)} = 11.58, p < .01$)。

同様に、9 つある評価項目別に実施年度を独立変数とし、得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、全ての項目で実施年度の主効果が有意であった(項目 1 [説明] $F_{(7, 334)} = 3.71, p < 0.01$; 項目 2 [難易度] $F_{(7, 334)} = 5.22, p < 0.01$; 項目 3 [分量] $F_{(7, 334)} = 11.30, p < 0.01$; 項目 4 [期待通り] $F_{(7, 333)} = 6.37, p < 0.01$; 項目 5 [役立つ] $F_{(7, 334)} = 4.63, p < 0.01$; 項目 6 [資料] $F_{(7, 332)} = 2.32, p < 0.05$; 項目 7 [時間配分] $F_{(7, 334)} = 18.87, p < 0.01$; 項目 8 [総合評価] $F_{(7, 334)} = 4.75, p < 0.01$; 項目 9 [推薦] $F_{(7, 333)} = 3.02, p < 0.01$)。多重比較 (Tukey の HSD 検定) を行った結果を整理したものを以下に示す。

- ① 項目 1 [説明]: 2011 年度, 2012 年度, 2015 年度 > 2008 年度; 2011 年度 > 2010 年度
- ② 項目 2 [難易度]: 2011 年度, 2013 年度, 2015 年度 > 2008 年度; 2011 年度, 2013 年度 > 2009 年度; 2011 年度 > 2010 年度
- ③ 項目 3 [分量]: 2009 年度, 2010 年度, 2011 年度, 2012 年度, 2013 年度, 2014 年度, 2015 年度 > 2008 年度; 2011 年度, 2013 年度, 2015 年度 > 2012 年度
- ④ 項目 4 [期待通り]: 2011 年度, 2012 年度, 2013 年度, 2014 年度, 2015 年度 > 2008 年度; 2011 年度 > 2009 年度, 2010 年度
- ⑤ 項目 5 [役立つ]: 2009 年度, 2011 年度, 2012 年度, 2013 年度, 2014 年度, 2015 年度 > 2008 年度
- ⑥ 項目 6 [資料]: 多重比較の結果には有意差が見られなかった
- ⑦ 項目 7 [時間配分]: 2009 年度, 2010 年度, 2011 年度, 2013 年度, 2014 年度, 2015 年度 > 2008 年度; 2009 年度, 2010 年度, 2011 年度, 2013 年度, 2014 年度, 2015 年度 > 2012 年度
- ⑧ 項目 8 [総合評価]: 2011 年度, 2012 年度, 2015 年度 > 2008 年度; 2011 年度, 2012 年度, 2015 年度 > 2010 年度
- ⑨ 項目 9 [推薦]: 2011 年度 > 2008 年度; 2011 年度, 2012 年度 > 2010 年度

表 2 自己評価式講義評価に対する主成分分析結果および記述統計量 ($N = 338$)

項目	第一主成分	M	SD
8. 総合的に判断して今回の講義に満足している (総合評価)	0.81	4.74	0.51
9. 後輩や友人に薦めたくなるような講義だった (推薦)	0.78	4.78	0.50
5. 講義内容は役に立つ内容だった (役立つ)	0.71	4.73	0.49
2. 講義内容の難易度は適切だった (難易度)	0.69	4.70	0.55
4. 講義内容は期待通りだった (期待通り)	0.67	4.51	0.74
3. 講義内容の分量は適切だった (分量)	0.64	4.38	0.88
1. 講師の説明は分かりやすかった (説明)	0.63	4.68	0.52
6. 使用したレジュメ, 資料等は適切だった (資料)	0.61	4.44	0.73
7. 講義の時間配分は適切だった (時間配分)	0.58	3.96	1.11

表 3 「講義評価」得点の経年変化

	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	全体
N	37	42	45	48	43	39	43	45	342
M	4.05	4.49	4.47	4.76	4.53	4.68	4.59	4.70	4.54
SD	0.55	0.46	0.49	0.31	0.35	0.42	0.37	0.33	0.45

注) Tukey の HSD 検定の結果, 「2009 年度, 2010 年度, 2011 年度, 2012 年度, 2013 年度, 2014 年度, 2015 年度 > 2008 年度」, 「2011 年度 > 2009 年度, 2010 年度」であった。

5. 考察

沖縄こどもの国での生活科に関する授業実践は、どの年度の「講義評価」も平均値は「4」を超えていた。最も低かった2008年度でもその得点と真ん中の評定値である「3」に対して1サンプルの t 検定を行った結果、2008年度の得点は、真ん中の評定値「3」よりも有意に高かった($t_{(36)} = 11.58, p < .01$)。つまり「小学校の教員免許の取得を希望する学生にとって、沖縄こどもの国での校外学習を取り入れた生活科の教師教育実践は有意義」と受講学生が評価したと判断できる。

各項目別に見ると、2008年度の実践は他の年度の実践よりも低い評価となったものが目立つ。しかしこれは2008年度が1日日程での授業実践の初年度であり、それ以降は前年度の反省や受講学生からの評価を受けて内容を改善したことが効果を示していったことの裏返しであるとも判断できる。その一方、「8. 総合的に判断して今回の講義に満足している[総合評価]」が高いものの「3. 講義内容の分量は適切だった[分量]」や「7. 講義の時間配分は適切だった[時間配分]」で、2012年度の実践が相対的に低い評価となった。特に時間配分については、2012年度は2008年度以外の他の年度の実践よりも低評価であった。これは、2012年度の講義内容が当初予定していた時間配分を大幅に超過してしまったことや、大雨の影響で予定していた講義の順番を入れ替えたり内容の変更をしたりしたことが影響していると考えられる。屋外活動時に雨が降った年は2012年度だけではなく2010年度や2011年度など複数回あったが、いずれも小雨であったり短時間であったりするなど降雨による影響は限定的であった。天候不良だけでなく講義内容の時間配分も2012年度は出だしから予定を大幅に超過し、ほぼ全ての内容を予定どおりに展開できなかった。つまり、そもそも計画段階から見通しが甘かったと言わざるを得ない。それを証明するように、2012年度は、授業評価の改善・要望意見を自由記述で回答した27名中21名が時間配分に関する改善を要求した。2008年度や2012年度を含むどの年度の実践でも時間配分を問題として指摘する学生がいた。雨天

時だけでなく晴天時の屋外での活動時における日差しの強さと暑さ、室内と屋外の活動が組み合わさっていることと関連して空調の効いた室内と屋外との温度差が「体力的に問題である(辛い)」という指摘もあった。このことを踏まえると、授業内容を構成する際には時間配分やその順序もあわせて十分検討しなければならない。一方、希望者のみ別途支払うことにしていた乗馬体験の料金が高いという意見が2010年度に1名から指摘された以外には、入園料等の自己負担額についての意見はなかった。つまり、沖縄こどもの国での学びの対価として一連の実践での受講学生の自己負担額はリーズナブルだと判断できる。

また、講義内容の都合上、土曜日や日曜日に振替実施していることに関連して「そもそも平日ではない土曜日や日曜日に丸一日授業すること」に否定的な意見を示した受講学生もいた。現在は教員免許取得に関する科目の大半に対して、初回履修時の登録優先指定クラスを定めることで、「定員超過のため履修科目が履修登録できない」状況を避ける配慮を教育学部として行っている。また、学生は教員免許取得に必要な科目を4年前期(7セメスター目)までに履修・単位取得する必要⁴がある。そのため、生活科に関する授業科目は複数クラス開講されており、土曜日や日曜日に振替開講しない内容のクラスが選択可能であっても標準修業年限(4年)で卒業するには事実上選択の余地がない学生もいると思われる。さらに2013年度や2015年度では、受講学生が同時に履修している他の科目の振替授業(予定)日とのダブルブッキングも発生した。個々の学生はそれぞれ様々な科目を履修しているため、その全ての履修機会を保障できる時間割の編成は困難である。2013年度は当初予定日から再振替して実施したため大多数の学生の履修は保障できたが、再振替することによって、再振替日がダブルブッキングになった学生の履修機会を損なってしまった。このように土曜日や日曜日等に集中講義形式で振替が生じた場合に、時間割上は履修登録可能でも一方の授業を相当数欠席することになってしまうため事実上履修できない事態も生じてきている。それ以外にも様々な視点から配慮する事項が生じるため、一部集中講義化して振替で実施する科目で

は、シラバスに振替日を明記した上で履修登録できるようにするだけでなく、教育学部全体で振替開講日を把握するなどして、標準履修（初回履修時の登録優先指定）時期が重複している講義科目・クラスが同一日に振替開講しないように調整することが求められている。

「6. 使用したレジュメ、資料等は適切だった [資料]」で多重比較 (Tukey の HSD 検定) を行った結果に有意差が見られなかった理由として、受講者に当日配布されるレジュメがほとんどなく、持参させた生活科の学習指導要領の解説や説明時に使用した PowerPoint によるスライド提示や動画等が質 (内容)・量 (分量) とも適切だと判断されたことが考えられる。

自由記述形式での評価と関連して、2010年度からはヘビが餌である生きたネズミを捕食する様子の観察を取り入れている。このことについて「ヘビやネズミの捕食活動は知らない。命の大切さや命を奪う事を仕事にする人の大変さを伝えるなら養豚場や養鶏場がある。(2012年度)」や「ヘビの食べるのと、豚の映像⁵はムリでした。(2014年度)」という否定的な意見を示した受講学生が2名いたが、「ヘビの食事のシーンはすごかった。自由にまわられたのも良かった。(2010年度)」, 「普通には入ることが出来ないバックヤードに入ることが出来た。子どもたちに見せることが正しいかどうかは分からないがヘビがほ食する姿などをみれたことは貴重な体験だった。(2011年度)」, 「ヘビがネズミを食べるところは普段あまり意識しない視点だったので色々考えさせられた。(2012年度)」, 「ハツカネズミをヘビがたべる捕食シーンはじめて弱肉強食を実際にみた。(2013年度)」, 「ヘビがネズミを食べるところを見たり、ブタの去勢のVTRを見ることができて良かった。(2014年度)」や「ヘビのネズミを食べる所を初めて見れて、食について考えさせられた。生活科授業についてあらためて考えさせられみんなの意見を聞くことができた。(2015年度)」のようにどの年度でも肯定的に評価している学生のほうが多い。

事後レポート課題⁶である絵日記の題材に「ヘビがネズミを食べる様子」を選ぶ者も多い。生きたネズミをヘビが捕食する様子の観察であれば、事前に条件を整えれば出前授業形式でも観察可能で

あるため、校外学習を取り入れなくても生活科の授業に活用できる。しかし「子どもたちに見せることが正しいかどうかは分からないがヘビがほ食する姿などをみれたことは貴重な体験だった。」という学生の言葉が表すように、直接教材にできるかどうかという視点ではなく、そこから一步踏み出して「教師の学びとして重要」と学生が感じ、「自然との関わりを児童にどのように学ばせるのか」を考えるための契機になったことのほうが、この授業の成果の一つであると判断できる。

授業評価アンケートの「①自己評価式講義評価: 4. 講義内容は期待通りだった [期待通り]」については、質問内容や回答選択肢を考え直す必要がある。2015年度の回答の中に「2 あまりそう思わない」と回答した1名と「4 ややそう思う」と回答した1名の2名が、回答用紙の余白欄に「期待以上だった」旨加筆して回答している。この項目は「期待通りか否か」を問う問題である。そのため「期待以上だった」場合、行間を読んで（「そう思わない」は、期待したほどではなかったという否定的な意味だと理解して）肯定的な回答をする場合もあれば、「(期待をいい意味で裏切ったという肯定的な意味で) そう思わない」を選択することもある。つまり、否定的な回答を選択した者の中には、講義内容そのものを肯定的にとらえている者が含まれている可能性がある。今後は「4. 講義内容は期待通りだった (あるいは期待以上だった)」というように、より評価内容が的確になるような項目へと変更する必要がある。

以上、沖縄こどもの国での生活科の教師教育実践は、生活科で利用できる教材・教具を沖縄こどもの国が紹介・提供するだけという即物的な学びではなく、校外学習を意図的に取り入れたアクティブラーニング型の学びという、これからの学校教育の中で一層重要とされることを小学校教員免許取得希望者に実体験してもらったものである。しかもそれは、沖縄こどもの国が提供できる小学校低学年向けの体験をただ追体験するのではなく、実際に授業する小学校教員の視点と児童の視点を行き来しながら体験することで授業研究の視点を育むことを意識したものである。

2008年度から2015年度までの各年度の実践を受講した学生は、「沖縄こどもの国での校外学習

を取り入れた生活科の教師教育実践は有意義」と評価した。実践の結果から判明した問題点を学生の授業評価等を基に改善していきながら「沖縄こどもの国ならではの学び」を追求していくことで、深みのある生活科の学びが提供できる小学校教員を養成し、この教師教育実践が児童の学びへ還元されることを期待したい。

6. 生活科を教える小学校教員養成実践のこれから

これまでに述べたように、琉球大学教育学部では責任の所在が不明瞭になりがちな生活科科目を、多様な科学が有機的に結合した学際的な体制の下で提供を行ってきた。また、沖縄こどもの国と連携することで、生活科の目標である「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせる」（文部科学省、2008a:72）ことを達成するとともに、実施における「交通や活動場所に対する安全等への十分な配慮」や「児童が安心して活動できる空間の確保」（文部科学省、2008b）を学べるように努めてきた。本科目を将来にわたって発展させ、より有意義なものとするためには、未来の小学校教員である学生の意欲をこれまで以上に引き出し、一層の効果が期待できる学習・体験の提供が期待される。この実現は多難であるが、解決に向けてのヒントはアンケート結果から探ることができる。

受講学生は、「校外学習を取り入れた生活科の教師教育実践は有意義」と理解しており、授業を「直接教材にできるかどうかという視点ではなく、そこから一步踏み出して『教師の学びとして重要』と学生が感じ、『自然との関わりを児童にどのように学ばせるのか』を考えるための契機」と位置付けている。これは生活科に関する科目であっても、児童の学習範囲に限定した授業内容のみを提供するのではなく、校外学習を通して発展的内容を提供し、将来授業を提供する側の人間として必要な知見や示唆を与える体験を学生自身が求めていると解釈できる。また、本稿考察では、高い学習効果が期待できる授業を安定して提供するため、天候に依存しない授業の検討も求め

られている。現在は動植物に関連する屋外体験が多数取り入れられているが、今後は、屋内体験の充実化や化学、物理など屋内での実験を基礎とする科学に関連する授業の開発にも力を入れ、小学校第3学年以降で学ぶ理科の授業とのつながりを意識していきたい。本科目受講の環境整備について、土曜日や日曜日に丸一日授業を行うことへの配慮が希望されているが、本学教育学部のカリキュラム流動性の低さや沖縄こどもの国のスケジュールと連動するため解決は容易ではない。しかし、次期カリキュラム構築の際には配慮したい。これまでは、「交通や活動場所に対する安全等への十分な配慮」や「児童が安心して活動できる空間の確保」（文部科学省、2008b）が整備された教育環境の場として沖縄こどもの国を活用したため、入場料等の自己負担が生じている。この点について、学生は「沖縄こどもの国での学びの対価として一連の実践での受講学生の自己負担額はリーズナブル」と認識しており、今後も沖縄こどもの国と連携して生活科に関する科目を提供していきたいと考えている。

【附記】

本報は、琉球大学教育学部理科教育講座の Faculty Development 活動の一環を報告するものである。また、本研究は次の分担で行った。吉田と吉岡が沖縄こどもの国での授業実践を企画・運営し、授業づくりやワークシート作成といった小学校の生活科の授業実践と直接関係する演習と当日の全体進行は吉田が、吉岡ほか沖縄こどもの国の職員がそれ以外の授業を担当した。受講学生の授業評価は中尾と吉田が分析した。これまでの実践を踏まえた上での次年度以降の教員養成実践の方向性に関しては齊藤と福本が分担して執筆した。最後に吉田がそれらをとりまとめた。

【文献】

- 朝倉淳(2002)「1 生活科教育学の構想 2. 生活科教育の特性」朝倉淳編『21世紀の初等教育学シリーズ 第5巻 生活科教育学』協同出版、5-8。
木村元(2015)『学校の戦後史』岩波書店、141-142。

- 小原友行 (2002) 「Ⅱ 生活科教育の理論 1. 生活科教育の歴史」朝倉淳編『21世紀の初等教育学シリーズ 第5巻 生活科教育学』協同出版, 18-19.
- 小林昭文 (2015) 『アクティブラーニング入門—アクティブラーニングが授業と生徒を変える—』産業能率大学出版部, 16-19.
- 真船和夫 (1986) 『真船和夫著作集 第3巻 子どもの発達と教材・授業』あずみの書房, 70-73.
- 文部科学省 (2008a) 『小学校学習指導要領』東京書籍, 72-73.
- 文部科学省 (2008b) 『小学校学習指導要領解説 生活編』日本文教出版, 41.
- 柴田義松 (1974) 『授業の基礎理論 [授業研究基本図書選 6]』明治図書, 69-70.
- 吉田安規良・高嶺智徳・杉尾幸司・松田伸也 (2009) 「小学校教員養成における動物園活用の意義—沖縄こどもの国での生活科に関する実践—」『日本理科教育学会九州支部大会発表論文集』第37巻, 63-66.

【注】

- 1 一般にアクティブラーニングとは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修（学習）者の能動的な学修（学習）への参加を取り入れた教授・学習法の総称であり、書く、話す、発表するといった活動に学修（学習）者が関与する。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループワークがその代表的な方法である。小林(2015)は、アクティブラーニング型授業を、100%ワンウェイ（最初から最後まで先生が話し続ける一方的な知識伝達型講義）でない授業と定義している。今回の実践は、上に例示されている方法の一部が取り入れられており、授業者が一方的に話し続ける形式でもない。
 - 2 類似内容が他の年度に行われた場合でも【 】で沖繩こどもの国職員の担当責任者名が明記されていない場合は、その年度の当該内容は吉岡が中心となって実施したことを意味する。
 - 3 受講登録者よりも当日出席者のほうが多いという状況になった。これは、登録上限単位数との兼ね合いから結局受講登録できなかった追加登録希望者1名が開講当日に参加したためである。
 - 4 4年後期（8セメスター目）である卒業直前学期に開講・履修する「教職実践演習」の登録の前提が、教員免許取得に必要な教職実践演習以外の全ての科目を履修・単位取得済であることとなっている。なお、複数免許の同時取得を希望している場合は、そのうちの1つの免許種に関してこの条件を満たす必要がある。
 - 5 ブタの去勢の様子を捉えた動画のこと。
 - 6 2012年度から事後レポート課題に絵日記を採用した理由は、2011年度を受講学生の事後レポートの中に、2010年度を受講学生が提出したレポートを学籍番号、所属、氏名だけ書き換えて提出したものがあった（元となるレポートがワープロソフトで作成されていたため簡単に改竄できた）ことが原因である。レポートを自力かつ直筆で作成させるとともに、生活科の授業を意識させるため2012年度からは絵日記の形式にしている。
- 1 一般にアクティブラーニングとは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修（学習）者の能動的な学修（学習）への参加を取り入れた教授・学習法の総称であり、書く、話す、発表するといった活動に学修（学習）者が関与する。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループワークがその代表的な方法である。小林(2015)は、アクティブラーニング型授業を、100%ワンウェイ（最初から